伝えようとしていた人と伝えなかった人々
～シベリア抑留者の消息とモスクワ放送～

島田　顯

昨年8月、「抑留者の消息　伝えたラジオ」(『朝日新聞』京都版2012年8月3日)という記事が掲載された。戦後直後にモスクワ放送(現ロシアの声放送)が、シベリア抑留者の中で帰還予定の者たちの名前、住所、家族に向けたお便り番組を放送していた。その放送を日本で聞いていたある方が、帰還予定抑留者の家族の元に、そのことを知らせる葉書を送っていたという。舞鶴引揚記念館(京都府舞鶴市)による企画展「抑留者のメッセージを伝えた男―ラジオ放送の安否情報を伝えた手紙」の開催にあわせて報じられたもの。

展示資料は、大阪府に住んでいた会社員で、1948年当時25歳位だった坂井仁一郎さんから、1988年に寄贈された。記事によると、抑留者の名前、日本にいる家族の住所などの情報を読み上げていることに気づいた坂井さんは、「聞き捨てならない」と思い、毎日のようにラジオに噛り付いてメモし、住所を探し、放送内容と氏名を葉書に書いて郵送した。坂井さんが送った葉書は約3カ月間で約700通、宛先不明で半分は戻ってきたが、感謝の手紙も200通近く届いたそうだ。

記事を受けて、あるシベリア抑留研究者から、放送原稿はモスクワ放送の文書館にあるのかという問い合わせ、調査の依頼があった。番組の放送が事実だとすれば、放送原稿などの史料がどこかに残されているはずであると。結局モスクワにはなかった。結論は、この番組を放送していたのは、モスクワ局ではなくハバロフスク局。だから史料はハバロフスクにあるのかもしれない。

さらに番組について、日露交流史に詳しい方から、戦後直後にハバロフスク放送局でアナウンサーを勤めた木村慶一さんの回想録(『モスクワ・日本・ハバロフスク―対日モスクワ放送員の手記―』川崎書店、1949年、89～97頁)のことを教えて頂いた。回想録によると木村アナは、抑留者の困窮した生活を実際に目にし、体験し、常に気がかりに思っていた。生活の実態を伝え、日本にいる家族の不安を取り除くために、このような番組を企画。アンケート用紙を作って抑留者に書いてもらい、それをもとに1947年9月に番組「おたより放送」を開始した。便りだけではなく、収容所楽団の演奏を録音し電波に乗せていたという。

回想録を読んで、木村アナが本当に抑留者とその家族のことを思い、この番組の放送を始めたことがわかった。そして木村アナと同様に、抑留者とその家族のことを考えていた坂井さんが放送を聞いていた。木村アナの思いは日本に届いていたのである。

抑留者関連の番組を日本で聞いていたのは、坂井さんだけではなかったはずだが、坂井さんのように抑留者とその家族のことを本当に考えて、実際に抑留者の家族に消息を伝える葉書を送った人はいなかった。実はこの放送を日本の公式筋も傍受し、傍受記録を「モスクワ放送に依る抑留者人名表」(アジア歴史資料センターHPで公開)という文書にして残していた。文書を作成したのは、「留守業務局鮮満残務整理部」と名乗る組織。防衛研究所所蔵文書であることから、関東軍関連組織かもしれない。文書は、抑留者のリストとモスクワ放送の内容、それらに対する評価のみ。リストは墨塗りで、抑留者の人物名は特定できない。しかしながら、放送番組内容の抜き書きは、当時の放送の実態を知る上で貴重なものであり、「おたより放送」が紛れもない事実であることを裏付けている。

この文書から、さらに一つのことが明らかである。調査成果を月報で発表していること、放送についての問い合わせが来ているが、取扱いには慎重を期さなければならないとしていることから、この組織は情報を本当に知りたかった人々に、積極的にその情報を届けなかったようだ。もちろん放送自体、また傍受組織についてはさらなる調査が必要であるし、軽率な判断はできない。だけど木村アナ、坂井さんの思いに比べれば、非常に冷徹な、まさに役人の文書といえるのではないだろうか。

<新刊紹介>

『明治のサーカス芸人はなぜロシアに消えたのか』

大島幹雄著　祥伝社　平成25年刊　¥1600+税

筆者がこの本を書くきっかけとなったのは、三枚の写真、それは日本人およびその家族の鮮やかなサーカス芸人の姿だった。それを教えてくれたのは筆者のサーカス研究の恩人エフゲニイ・スラフスキーである。そして写真に映る「イシヤマ」「タカシマ」「シマダ」を追うことになった。サーカス芸人の海外進出は幕末から始まっている。

慶応二年に4グループ、40人の芸人が出国している。そしてその芸人たちはパリ万博にも出演するという偉業を成し遂げてもいるのだ。子供をつかった足芸などは欧州では見られなかった。ロシアで日本のサーカス芸人を見たという記録が残っているのは榎本武揚が初めてで、妻への手紙に残されている。

そもそもサーカスの起源は奥深く、キリスト教以前の教会的儀式に淵源だという説もあるとのこと(『アートタイムス』no. 10)。当協会の講演会で下斗米先生が述べられたように、ロシアにおける宗教と民族の関わりの深さを考えると、1910年代からのロシア・アヴァンギャルド運動が、「サーカスに追い風となった」ことも頷かれる。舞台演出家スタニスラフスキーも自伝『芸術におけるわが生涯』のなかで、日本のサーカス芸人を評価しているという。

そして筆者は三枚の写真を追っていく。革命前のロシアで最も有名だった日本サーカス団はヤマダサーカスで、それは“戦慄的なハラキリショー”だった。いくつかのサーカス団の活動や、また個人的な紹介の一人としてヤマダサーカスの一員である山根ハルコの回想録も見逃せない。日本最大のサーカス団、木下サーカスの誕生もロシアと大きな関わりをもっているのである。ロシアからもバロフスキイサーカスが来日、皇族も観覧し大当たりしている(1903年)。またカマイチという芸人はプロモーターとしてロシアにサーカス場まで建設した日本人もいた。時代に翻弄され身に覚えのない罪によって粛清されるという日本人芸人の生涯もあり、それを名誉回復する息子の動向など、ロシアの地に消えていった芸人たちが展開されていく。三枚の写真の謎も筆者の熱意によって次々と解かれていく。まさに本書は、「歴史に埋もれた“日本の奇跡”」の発掘といえるだろう。　(波)